西部開発事業（畑地帯総合土地改良事業）

—緊急発掘調査報告—

上島遺跡

1974

伊那市教育委員会

西部開発事業(畑地帯総合土地改良事業)

—緊急発掘調査報告—

上島遺跡

1974

伊那市教育委員会

序

伊那市は、ここ数年来急速な開発にともない中央高速自動車道路、西部開発等の土地開発事業がめざましく行なわれ、丘陵や自然景観が次々と消滅していく状態であります。

このような開発の流れは、時代の要請であり経済社会の発展や郷土住民の生活向上のためには仕方のない面も含んでいますが、この反面、永い間、郷土の人々が育て、かつ暖かくはぐくんできた多くの文化遺産を破壊する結果を導いており、矛盾する開発と文化財保護の問題は早急に解決すべき問題の一つであります。

上島遺跡は、昭和48年度西部開発事業計画に該当しており、発掘調査は昭和48年12月に実施されました。その結果は報告書に述べられているように、縄文前期の時代から平安時代に至る住居址４基と、竪穴と称する遺構５基が検出され、伊那市の歴史に明るい一頁を提供していただきました。

発掘調査に際しては、深いご理解をいただいた南信土地改良事務所職員一同、酷寒の中で直接調査に精進下さった団長友野良一氏、調査員各位、作業員の皆様、この調査のために御協力いただいた第九工区委員長、並びに委員の各位に対し、深甚な謝意を表する次第であります。

昭和49年３月20日

伊那市教育委員会教育長

松　沢　一　美

凡　　例

1．今回の発掘調査は西部開発に伴なう、県営畑地帯総合土地改良事業で、第1次緊急発掘調査にもとづく報告書とする。

2．この調査は、県営畑地帯総合土地改良事業に伴なう緊急発掘で、事業は長野県南信土地改良事務所の委託により、伊那市教育委員会が実施した。

3．本調査は、昭和48年度中に業務を終了する義務があるため、報告書は図版を主体とし、文章記述もできるだけ簡略にし、資料の再検討は、後日の機会にゆずることにした。

4．本文執筆者は、次のとおりである。担当した項目の末尾に氏名を記した。

友野良一　　小池政美　　根津清志
御子柴泰正　　辰野伝衛　　福沢幸一

図版作製者

◦遺構および地形

小池政美　　友野良一

◦土器拓影および実測図

小池政美　　友野良一

◦石器実測図

根津清志

写真撮影

◦発掘および遺構

小池政美　　友野良一

5．本報告書の編集は主として、伊那市教育委員会があたった。

目　　次

序
凡　　例
目　　次
挿図目次
図版目次
第Ⅰ章　環　　境 …… (1～3)
第1節　位　　置 …… (1)
第2節　地形・地質 …… (2)
第3節　周辺遺跡との関連 …… (2)
第Ⅱ章　発掘調査の経過 …… (4～6)
第1節　発掘調査に至るまで …… (4～5)
第2節　調査日誌 …… (5～6)
第Ⅲ章　遺　　構 …… (7～13)
第1節　住居址 …… (7～10)
第2節　竪　　穴 …… (11～13)
第Ⅳ章　遺　　物 …… (14～21)
第1節　土　　器 …… (14～18)
第2節　遺構内出土土器 …… (18～19)
第3節　石　　器 …… (20～21)
第Ⅴ章　所　　見 …… (21～24)

挿図目次

第1図　位置及び遺跡分布図 …… (1)
第2図　地形図 …… (3)
第3図　遺構配置図 …… (7)
第4図　第1号住居址実測図 …… (8)
第5図　第1号住居址カマド実測図 …… (9)
第6図　住居址実測図（上第2号、下第3号）(10)
第7図　第4号住居址実測図 …… (11)
第8図　第4号住居址カマド実測図 …… (11)
第9図　竪穴実測図（左上第1号、右上第2号、左下第3号、右下第4号）(12)
第10図　第5号竪穴実測図 …… (13)
第11図　土器拓影 …… (15)
第12図　土器拓影 …… (17)
第13図　土器拓影（遺構内出土土器）…… (19)
第14図　石器実測図 …… (20)

図版目次

図版1　遺跡全景
図版2　遺構（住居址）
図版3　遺構（住居址）
図版4　遺構（竪穴）
図版5　遺物出土状況及び記念撮影

図表目次

第1表　周辺遺跡一覧表 …… (2)
第2表　遺構内出土土器一覧表 …… (18)

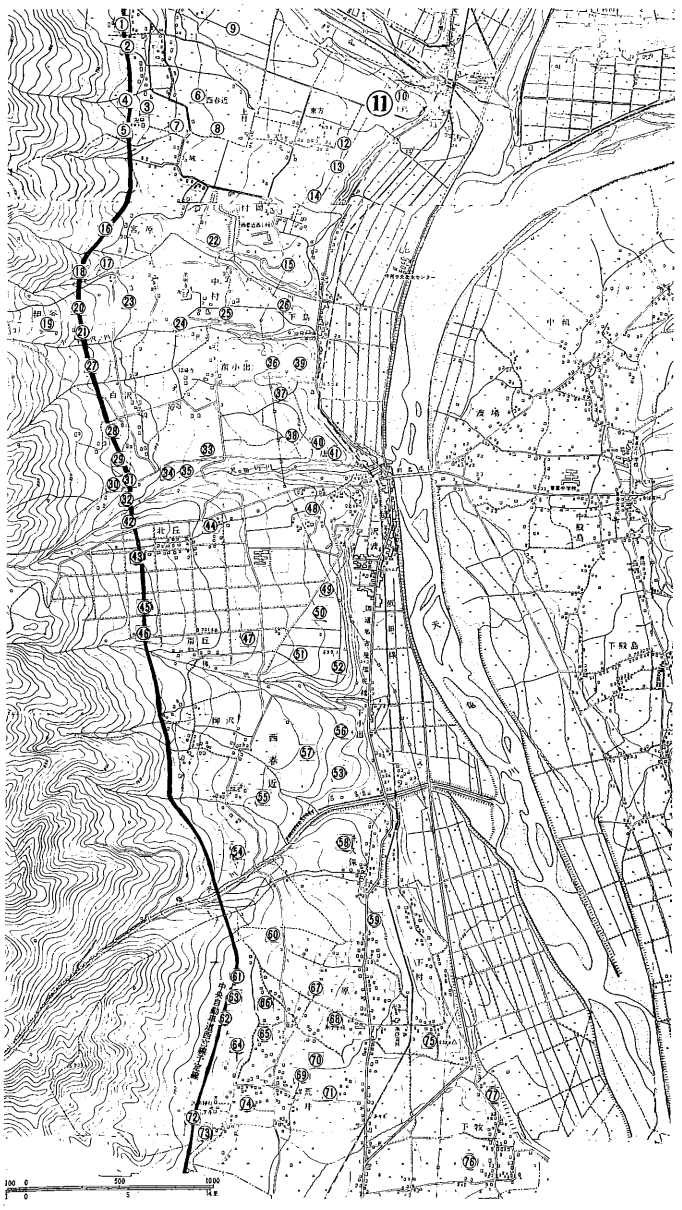
第Ⅰ章　環　　境

第１節　位　　置

上島遺跡は、長野県伊那市西春近上島1380の２番地に所在している。伊那市街より遺跡までに至る道順は次の通りである。まず飯田線伊那市駅で降り、国道１５３号線を駒ヶ根方面へ向って約１km程南下すると小黒川に至る。小黒川を渡り切った地点で右折して段丘を登りつめた平坦面が遺跡である。（小池政美）

遺跡の名称

(1)城平上　(2)城平　(3)常輪寺址　(4)宮林　(5)山の根　(6)山本　(7)常輪寺下　(8)上村　(9)北条　(10)上島下　(11)上島　(12)東方Ｂ　(13)東方Ａ　(14)村岡北　(15)村岡南　(16)大境　(17)中原　(18)百駄刈　(19)西垣外　(20)細ケ谷Ａ　(21)細ヶ谷Ｂ　(22)小出城　(23)宮ノ原　(24)浜射場　(25)中村　(26)中村東　(27)山寺垣外　(28)白沢原　(29)名廻　(30)名廻西古墳　(31)名廻東古墳　(32)名廻南　(33)児塚　(34)鎮護塚西古墳　(35)鎮護塚東古墳　(36)カンバ垣外　(37)丸山　(38)南小出南原　(39)薬師堂　(40)唐木原　(41)唐木古墳　(42)北丘Ｂ　(43)北丘Ａ　(44)北丘Ｃ　(45)南丘Ｂ　(46)南丘Ａ　(47)南丘Ｃ　(48)眼田原　(49)山の神　(50)上の塚　(51)沢渡南原　(52)下小出原　(53)天伯原　(54)南村　(55)東田　(56)天伯　(57)下小出原　(58)井の久保　(59)表木原　(60)山ノ下　(61)菖蒲沢　(62)富士山下　(63)富士塚　(64)広垣外１　(65)広垣外２　(66)鳥井田　(67)高遠道　(68)西春近南小学校附近　(69)安岡城　(70)城の腰　(71)横吹　(72)和手　(73)上手南　(74)宮入口　(75)寺村　(76)下牧　(77)下牧経塚



第１図　位置及び遺跡分布図

第2節　地形・地質

伊那谷全般に共通する地形は西に木曽山脈、東に赤石山脈、（その前山である伊那山脈）とにはさまれた南北に細長い盆地状地形を呈している。中央部の最も低い部分には水源を諏訪湖に発した天竜川が流れいわゆる、縦谷状地形を成している。さらに天竜川の両岸に数多くの小河川があり、それらによって形成された大小様々の扇状地、河岸段丘、渓谷が展開している。

伊那市近郊では小沢川、三峰川、小黒川、あるいはその他数多くの支流によって扇状地や河岸段丘がつくられている。段丘は竜西では5段、竜東では8段を成している。

本遺跡は中央部に天竜川、東より三峰川（赤石山脈に源を発する）、西より小黒川（木曽山脈に源を発する）の三河川が接する地点に位置し、段丘自体も小黒川によるものと、天竜川、三峰川によるものとがL字状に発達している。

遺跡の基盤は小黒川に勢力があったとみえて大部分が木曽山脈の花崗岩であり、その上に洪積世期に形成された乗鞍火山灰土が覆っている。ところどころには、山麓より流れ出した清水が小河川をつくり、さらに比高2m前後の小段丘が発達している。段丘崖のいたるところに湧水がみられ、春先ともなれば芹が育ち、美しい景観を呈している。

遺物は大部分が褐色土層、あるいは漸移層に近い層より出土している。　（小池政美）

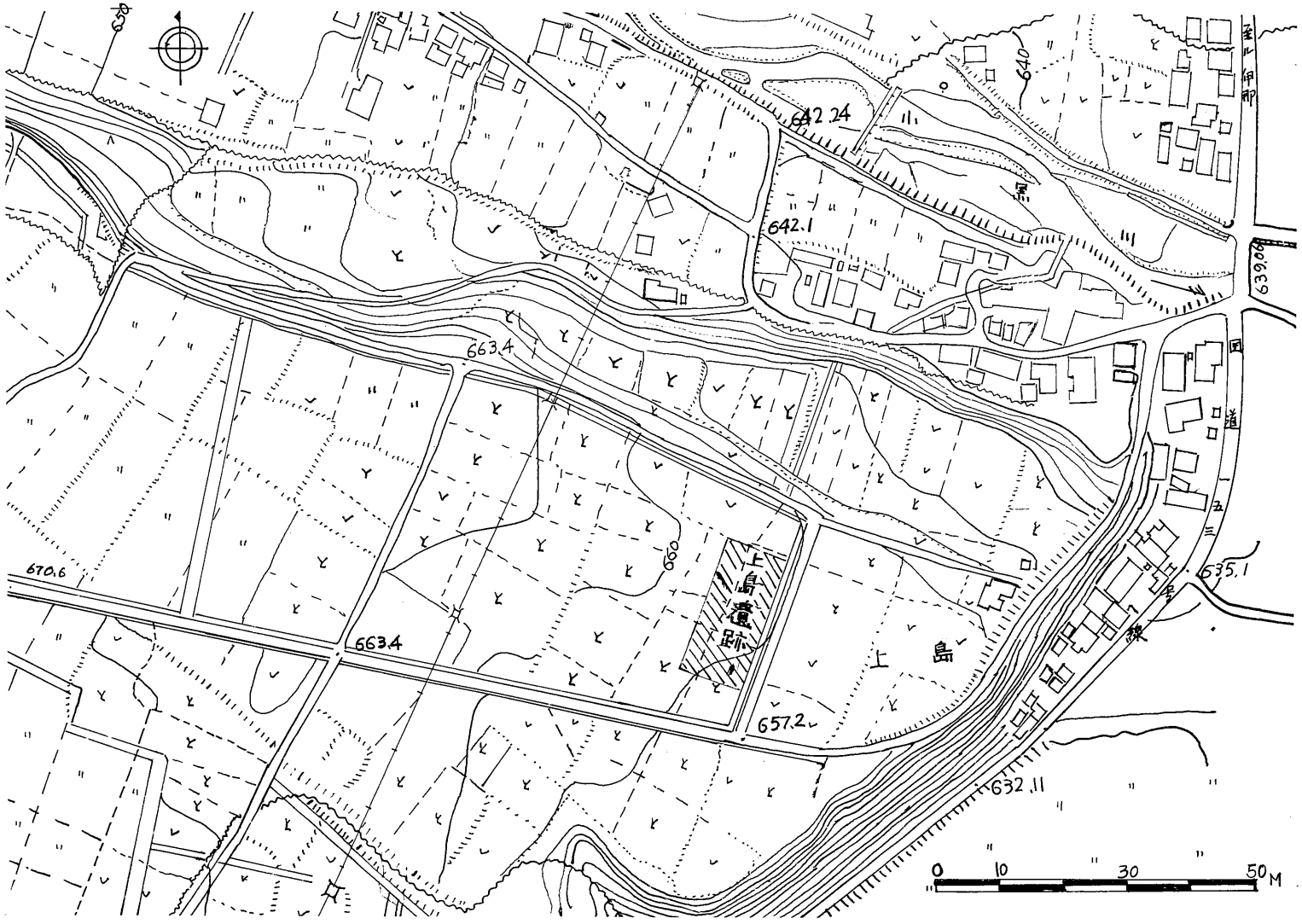
第3節　周辺遺跡との関連

上島遺跡は出土遺物からして、縄文前期時代の大集落が所在するという概念を強く持ち続けていました今回の発掘は調査地区が限られた範囲であった為に集落論を展開するところにはいたらなかったが、それでも縄文前期時代の住居址を2基発見できたのは大きな成果と思われる。

上島遺跡を含めた周辺遺跡の内容は次の通りである。（第1図参照）

No.	遺跡名	所在地	旧石器	縄文時代						弥生			奈良平安			中世	備考
				草	早	前	中	後	晩	前	中	後	土	須	灰		
1	城平上	山本838					○						○	○	○	○	中央道(8675)
2	城平	〃 793外					○	○	○				○	○	○	○青	中央道(8677)
3	常輪寺址	〃															
4	宮林	城728					○										(8673)
5	山の根	〃441			○	○	○	○	○			○	○	○	○	○	中央道(8676)
6	山本	山本					○	○				○					(2273)
7	常輪寺下	城・山本					○						○	○			
8	上村	上村					○					○					(2269)
9	北条	山本												○			硯
10	上島下	上島	○			○	○										
11	上島	〃				○	○						○	○	○		(2278)
12	東方B	東方					○										
13	東方A	〃						○								○青	
14	村岡北	村岡					○										宋銭
15	村岡南	〃					○										(2276)

第1表　周辺遺跡一覧表


642.24
642.1
640
639.06
663.4
660
670.6
663.4
上島遺跡
上島
657.2
632.11
635.1
0 10 30 50M

第2図　地　　形　　図

第II章　発掘調査の経過

第1節　発掘調査に至るまで

西部開発事業（県営畑地帯総合土地改良事業）は、伊那市、南箕輪村、箕輪町の三市町村竜西地区を区画整理して、大規模農業に転換させることを主眼に置いた事業であり、国県の補助金のもとに実施される予定である。この計画は10年程前から設計され、本工事は一昨年より実施された。

前述した如く大規模な土地造成事業による為に、数多くの埋蔵文化財が破壊寸前に直面していた。そこで長野県教育委員会は中央道路線内にかかる埋蔵文化財の分布調査とともに西部開発事業にかかる埋蔵文化財の分布調査をも実施し、現状保存を望むが、やむえない場合には緊急発掘調査を行なって記録保存をするように市町村教育委員会へ指導をした。

上島遺跡緊急発掘調査に至るまでの経過を簡略に記してみよう。

昭和48年7月6日　長野県教育委員会指導主事桐原健、南信土地改良事務所橋詰主任、工事委員長酒井岩夫議員、伊那市教育委員会浦野課長、小池の四者で、現地協議を行ない、予算額を算出する。当時点では上島遺跡は道路拡幅だけであるからして、遺跡破壊は少ないのではないかという申し出が橋詰主任より提言された。

昭和48年7月9日　県教育委員会より発掘調査予算書と発掘調査計画案が市教育委員会へ届く。

昭和48年9月19日　市教育委員会の保坂、小池が南信土地改良事務所へ行き、その後の進展状況を尋ねるそれによると設計変更がなされ、計画書を再検討してもらいたいと申し出があった。

昭和48年9月20日　依頼を受けた計画書を再検討し、南信土地改良事務所へ提出する。

昭和48年9月　日　南信土地改良事務所長より、契約締結の通知がある。

昭和48年10月23日　発掘調査団と教育委員会事務局一同で、上島遺跡発掘調査についての打合せ会を開催する。

昭和48年11月26日　伊那市長と南信土地改良事務所長との間で 400,000円の契約を締結する。

昭和48年11月28日　教育委員会の小池が第9工区委員長赤羽茂則氏宅に伺い、今後の工事に支障のないように打合せを行ない、承諾書をいただく。

上島遺跡発掘調査会

〔調査委員会〕

委員長	松沢一美	伊那市教育委員会教育長
副委員長	福沢総一郎	伊那市文化財審議委員会委員長
委員	坂井喜夫	伊那市教育委員長
〃	向山雅重	長野県文化財専門委員
〃	木下　衛	上伊那教育会会長
〃	岡田謙一	南信土地改良事務所長

委　　員	辰野伝衛	伊那市文化財審議委員	
調査事務局	浦野孝之	伊那市教育委員会社会教育課長	
〃	保坂九市	〃	課長補佐
〃	小池政美	〃	書記

〔発掘調査団〕

団　　長	友野良一	日本考古学協会会員
調査員	根津清志	長野県考古学会会員
〃	御子柴泰正	〃
〃	辰野伝衛	伊那市文化財審議委員
〃	小池政美	長野県考古学会会員
〃	福沢幸一	〃

第2節　調　査　日　誌

昭和48年12月1日　発掘現場へ市のトラックにて器材運搬を実施する。

昭和48年12月3日　発掘現場へブルトーザーを入れ、終了次第ただちにグリットを設定する。グリットは全体をA地区とB地区に分け、A地区は東から西にかけてA～U、南から北にかけて1～15、B地区は同方法でA～L、1～20と決める。午後よりB地区を振り出しとして発掘調査を開始する。グリットを数ヵ所掘り下げてみると褐色土層中より縄文前期土器片が多数出土し、明日への望みが有効となった。

昭和48年12月4日　天候不順、特に風雨が強く作業中止とする。

昭和48年12月5日　本日より事実上本格的な発掘調査を開始する。BA1等数ヵ所を掘り下げてみると以前水田耕作をしたとみえて地場の層が10cm位あり、それを掘り下げるのに骨折りであった。BA7の北半に黒土の落ち込みが認められ、これを第1号住居址とする。本日もかなりの量の縄文前期土器片が出土し、明日は是非とも住居址を検出しようと一同おおいに胸がワクワク。

昭和48年12月6日　昨日検出された第1号住居址のプラン確認と、BB1、BC1附近のグリット拡張に主眼を置き、調査を進行させる。その結果、第1号住居址は西壁中央部にカマドを有する住居址と判明し、一同の念願であった縄文前期住居址への夢はうたかたの如く消え去っていった。グリット拡張は附近数ヵ所を拡げてみると、あいかわらず遺物出土量は多く、いずれも縄文前期土器片であり、出土層位は褐色土層とローム層の接点近くである。BC2に円形状の黒土の落ち込みが検出され、これを第1号竪穴とする。

昭和48年12月7日　第1号住居址の掘り下げを行なう。遺物は多く、床面上より須恵器の蓋、カマドの袖石近くより烏帽子形の甕が出土した。第1号竪穴のプランを確認する。BB17に黒土の落ち込みを検出し、これを第2号住居址とする。

発掘風景（第1号住居址）

昭和48年12月 8 日　本日は快晴であるとともに12月上旬としては珍しく温暖な一日であった。作業も順調、敏速に行なわれた。第１号住居址のカマドの精査と柱穴検出にウエイトを置いて調査を進める。第１号竪穴の掘り下げを行なう。覆土中よりかなりの量の縄文前期土器片が多数出土した。第２号住居址のプラン確認に専念し、その実体を調査しようと努める。作業中途で縄文前期土器片が多数出土し、我々が捜し求めていた住居址への望みが濃厚となってきた。ＢＤ18、ＢＦ18にそれぞれ落ち込みを認め、前者を第２号竪穴、後者を第３号竪穴と命名し、掘り下げる。ＢＥ５～ＢＥ６に落ち込みが確認でき、第３号住居址とする。教育委員会から浦野課長、保坂課長補佐、三沢係長三氏が応援に来てくれたので、Ｂ地区全般にわたって調査ができた。北側から西側にかけては水田造成の時に破壊されたとみえて遺物は何も検出できなかった。

昭和48年12月10日　昨日確認された第３号住居址のプラン検出に全力を傾け、附近のグリット拡張と住居址の掘り下げをする。住居址の東側に円形状の竪穴を発見し、これを第４号竪穴とする。

発掘風景（Ｂ地区）

昭和48年12月11日　第２号、第３号住居址、第４号竪穴の掘り下げを行ない清掃並びに、写真撮影を終える。午後よりＡ地区へ入る。ＡＨ４より灰釉陶器片が多数出土し、慎重に精査を重ねた結果附近は黒土の充満した落ち込みがあり、第５号竪穴とする。

昭和48年12月12日　第５号竪穴の掘り下げを行ない、写真撮影を済ませる。更にグリット掘りを西へと延長していくとＡＰ５に落ち込みを発見し、第４号住居址とする。日程が充分でない為に、全力を注ぎこんで掘り下げを開始する。

昭和48年12月13日　第４号住居址を完掘し、写真撮影を終える。本日をもって発掘調査を終える。

昭和48年12月14日　第１号竪穴から第５号竪穴までの実測。

昭和48年12月15日　第１号住居址と第２号住居址の実測。

昭和48年12月17日　第１号住居址と第２号住居址の実測。

昭和48年12月18日　第４号住居址の実測。

昭和48年12月20日　第１号住居址と第４号住居址の実測。

昭和48年12月21日　カマドのカッティング。

昭和48年12月22日　全測図の作製。

昭和48年12月23日　全測図の作製と器材の後かたづけ。

（小池政美）

〔作業員名簿〕宮下照視、橋爪日出子、池上勲、平沢公夫、平沢一雄、平沢友子、赤羽留吉、北原一喜、坪木一雄、有賀美咲、小林巌、米山通夫、湯沢うめ子、武田久雄、酒井富江、唐木淳、有賀国雄、坪木節夫、赤羽幸寿　（順不同）

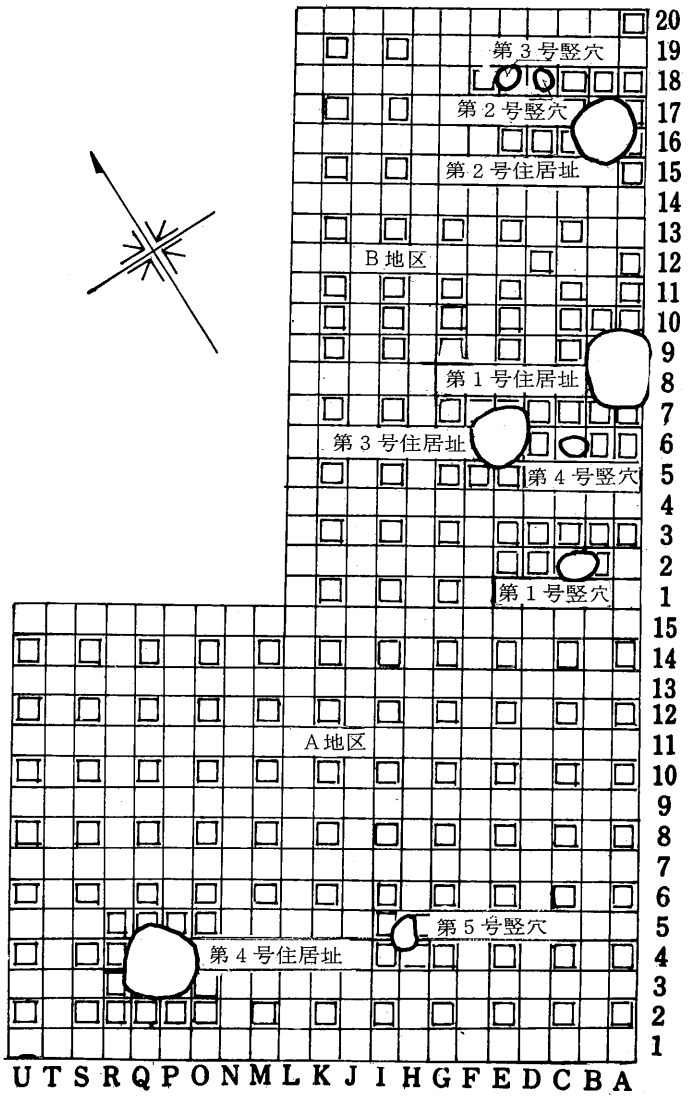
第Ⅲ章　遺　　構

第１節　住　　居　　址

第１号住居址（第４～５図、図版２）

調査地の中央東縁より検出された遺構である。黒色土層より褐色土まで掘り込んだ隅丸方形の竪穴住居址で、その規模は南北４ｍ、東西５ｍである。壁は垂直に近い角度で良好、東が高く45cmを有する。床面は僅かに西より東へ傾いている堅く叩いた個所が残存し、焼土が中央と東南の一部に検出された。

柱穴は等間隔に４本あり、直径40cm前後であまり深くない。カマドは西壁の中央に位置し、石組粘土カマドであり、形状は方形にて１ｍ×１ｍである。前方に凹状の灰溜りがあり、かなりの量の炭化物と灰が残っている。遺物は覆土より土師器の甕、杯、須恵器の杯等の破片がまばらに出土した床面よりは中央焼土附近より土師器の杯と、ほぼ完型に近い甕と、須恵器の蓋が出土した。灰釉陶器は１片も出土せず、本址は奈良時代に位置づけできると思われる。　　（根津清志）



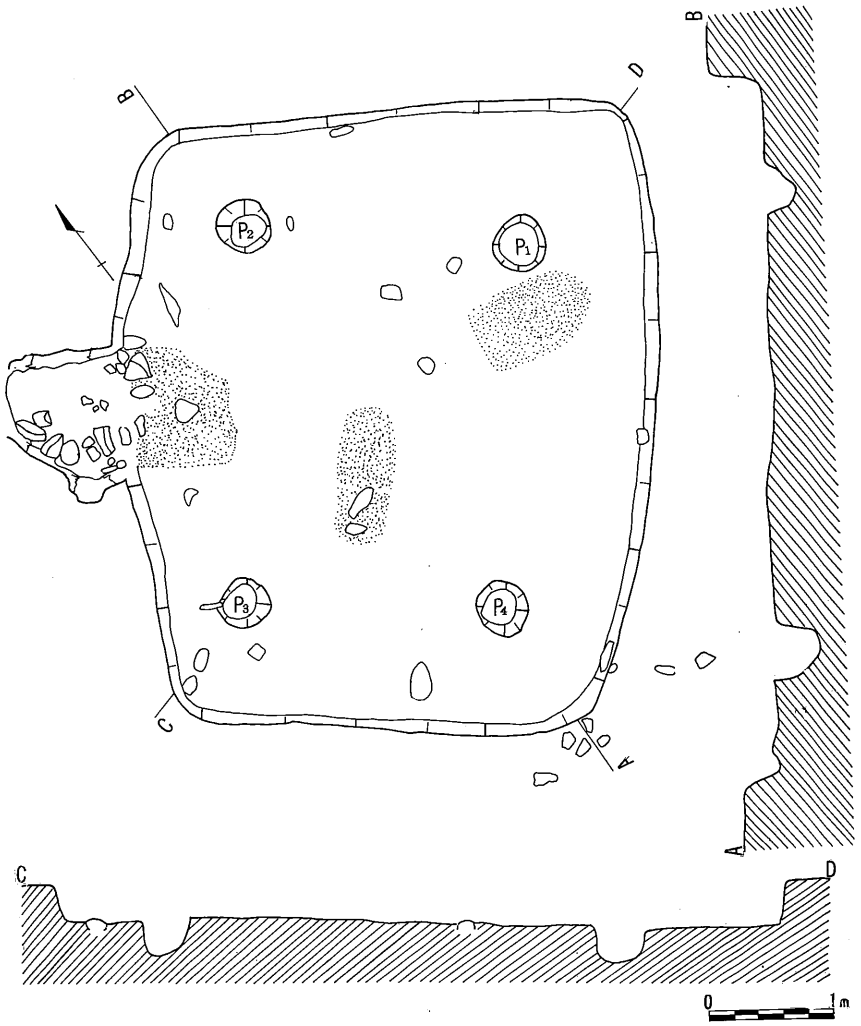
第３図　遺構配置図（1:500）

第２号住居址（第６図、図版３）

本址は遺跡地の最北端に発見されたものであり、地表下約40cmと割合に残い面に存したにもかかわらず保存状態は良好であった。砂礫混合のローム層を掘り込み、南北約４ｍ50cm、東西約４ｍ90cmに及び、やや東西に長い平面円形を呈する竪穴住居址である。壁は全周し、壁高は西30cm、東10cm程で、傾斜度は垂直に近く、床面に切り込まれている。主柱穴とおぼしきものはP_1、P_3、P_7 であり、正三角形状の配列をなしていると思われる。

床面はほぼ水平であり全面にわたって良く踏み固められている。尚床面の各所に散乱している石は大部分花崗岩で本址とは直接関係がないと思われる。

炉址は中央よりやや北寄りに位置し、床面をわずかに掘り込んで設定されており、形状は東西75cm、南北50cm程の平面長楕円形であり。炉縁石とおぼしき拳大程の自然石が中心部よりほぼ北、東、南に15cm離れて６個が配列されており、それらはいずれも火を受けて赤く焼けていた。断面は幾分すりばち状を呈し、その中に朱色の強い赤褐色の焼土と黒味の強い木炭が鮮明に検出された。炉縁石のレベルは一定ではなくて、ばらばらであった。本址は諸磯の古い時期に位置づけできると思われる。



第４図　第１号住居址実測図

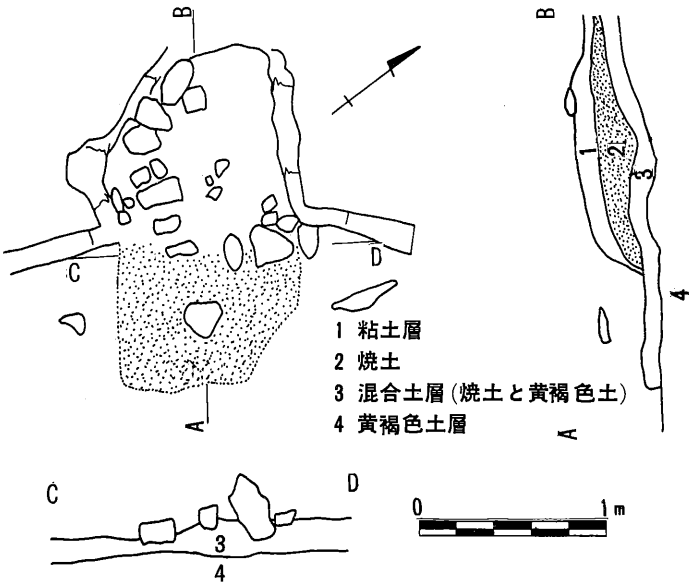
（小池政美）

第３号住居址（第６図、図版３）

砂礫混合のローム層を掘り込んだ竪穴住居址で、大きさは南北４ｍ30cm、東西４ｍ10cm程の円形プランを呈す。壁高は10～25cmを測り、状態は細礫を多く含む。床面は全般的に水平であり、軟弱な状態を呈している。東側の一帯に壁らしきものが確認できたが、調査を進めてみた結果、これは住居址に伴なう段状あるいはテラス状のものであると思われた。

柱穴は５本検出され、いずれも直径が20～30cm、深さは浅かった。配列は３本は住居址内に、あとの２本は住居址外に存在しており、上屋構造上興味深い点が指摘できると思われる。

炉址は住居址のほぼ中央部に位置し、床面を数cm掘り込んでつくられ、形状は南北60cm、東西60cm程の菱形状を呈している。それらに取り囲まれるようにして、長楕円形状の落ち込みがあり、なかに細礫がぎっしりとつまっていた。細礫は若干焼けており、表面に炭化物も附着していた。本址は繊維を含む縄文土器片が大部分を占めており、おそらく関東の黒浜式に並行すると思われる。（辰野伝衛）



第５図　第１号住居址カマド実測図

第４号住居址（第７～８図、図版２）

表土面より40cm程下った褐色土層を掘り込み構築された竪穴住居址である。平面形は隅丸方形を呈し、規模は南北４ｍ50cm、東西３ｍ90cmである。壁は全周し、概して40cm前後を測り、内傾気味である。

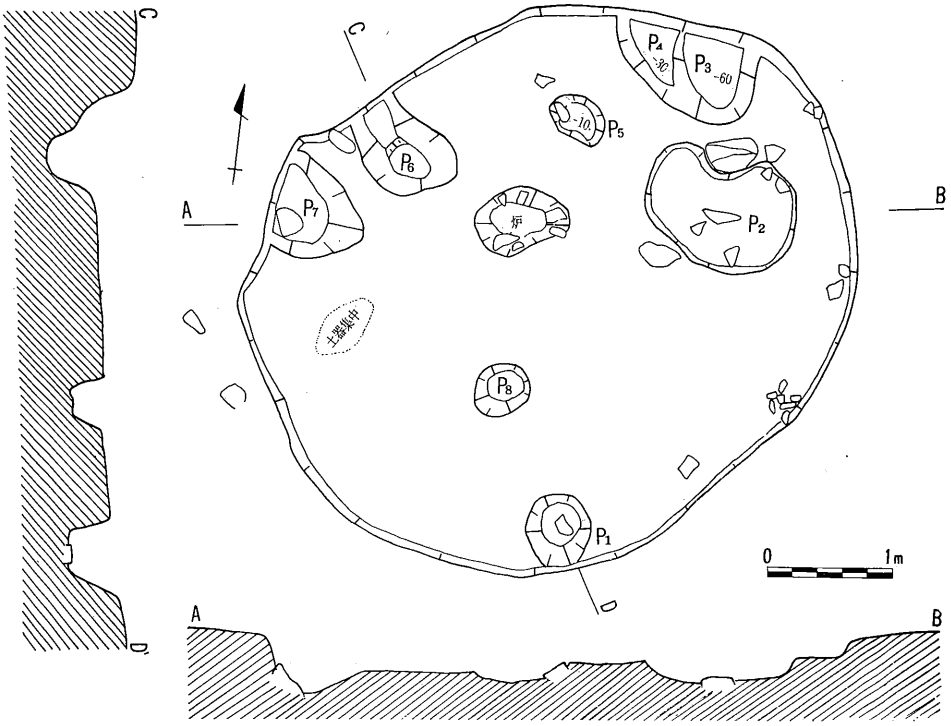
床面はローム層それ自体にタタキ状に構築され、硬度はカマド周辺は極めて硬いが、他は軟弱である。東壁近くにいたっては桑による攪乱の為に破壊されている。

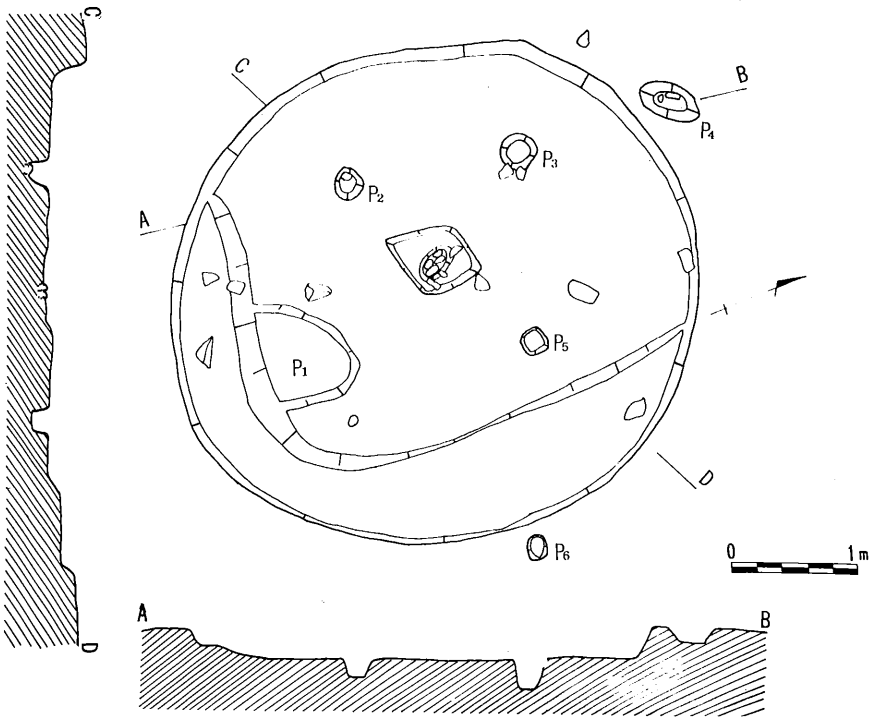
柱穴は各コーナーに四本あったと思われるが、東壁にそった二本は攪乱ぎみであって、はっきりと掌握できなかった。南壁にそった二本は中に拳大から人頭大程の石を規則正しく配してあった。

カマドは西壁南寄りの位置に壁に密着し、南北１ｍ25cm、東西60cm程の規模を持つ石組カマドである。構築方法は外側に花崗岩や変成岩の自然石を平坦面を内側に向けて直立させて組み、なかには頑強にする為に床面へ10数cm位くいこませてあった。焚口附近の石や天井石と思われるものは全面にわたって赤く焼けており、亀裂が混入していた。焚口直下の石は薪を置くのに利用したのであろう。

遺物は土師器の杯、内黒の杯、須恵器の杯、灰釉陶器片が出土した。

本住居址は平安時代に位置づけできると思われる。（小池政美）





第６図　住居址実測図（上第２号、下第３号）

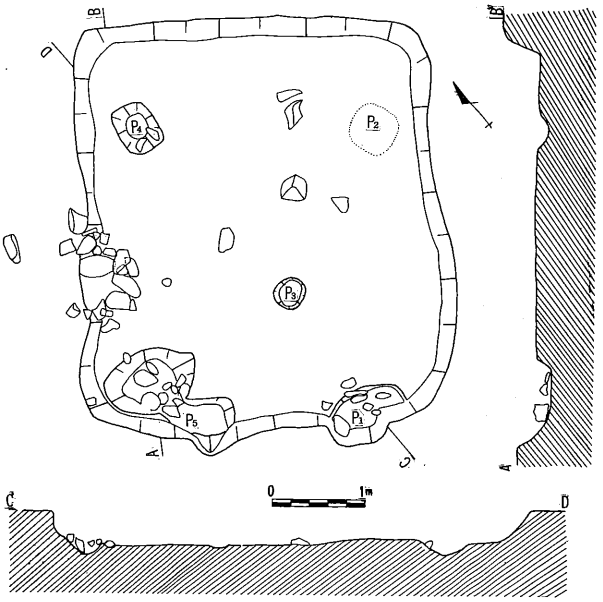
第2節　竪　　穴

第1号竪穴（第9図、図版4）

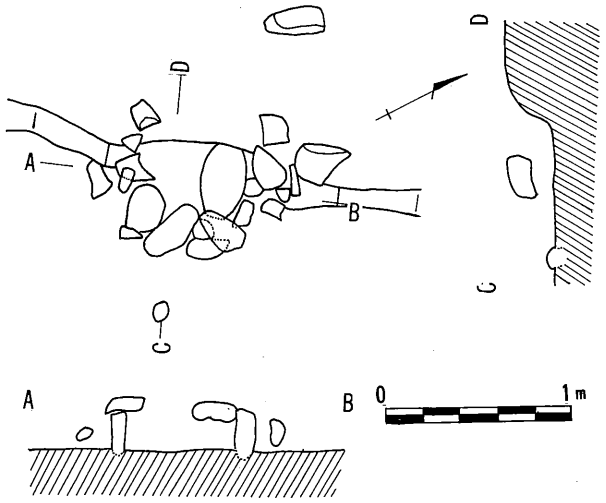
第1号竪穴は砂礫混りのローム層中に50cm前後掘り込み、構築されている。

その平面形は東西に長軸方向を持ち、全般的に長楕円形を呈しているが、部分的には幾分角張った一面をも窺うことができる。規模は東西辺約2m20cm、南北辺約1m90cmを測る。壁は全周しており壁面は垂直に近くつくられ、壁高は20cm～40cmの間に含まれる。

床面は中央より北寄りは平坦であるのに対し、南から中央部にかけてなだらかな傾斜を成し、断面は椀状を示しているわずかに踏み固められた形跡が認められる。遺物は関西系の土器も混合しているが大部分は諸磯の古い時期のものでありしたがって本竪穴は諸磯期の古いものであろうと思われる。　　（小池政美）



第7図　第4号住居址実測図



第8図　第4号住居址カマド実測図

第2号竪穴（第9図、図版4）

第2号竪穴は表土面より40cm程下った砂礫混りのローム層に掘り込まれた竪穴である。南北に長軸を、東西に短軸を指し、その規模は前者は1m60cm、後者は96cmであり、全体的なプランは不整楕円形とでも表現するのが最も適当であろうさらに切り込み面より45cm程下がった面で、やや北西寄りに円形状の竪穴が認められ、その中は高低差によって3つに分けることができる。ここで説明し易くする為に上段と下段という仮名称をつけておく。上段では壁は全周しており、壁高は10cmを示し、垂直で、細礫は少なく、凹凸はわずかに認められた。床面はわずかなタタキになっており、水平床を呈している。

下段では壁は全周しており、壁高は10～30cm程を示し、垂直で、細礫を多く含み、凹凸は顕著である。床面はわずかなタタキになっており、水平床を呈し、細礫が散乱していた。覆土中より少量の炭化物を検出、竪穴の南側の石は花崗岩で、その下に拳大程の緑泥岩が置いてあった。これは焼けており、周辺より

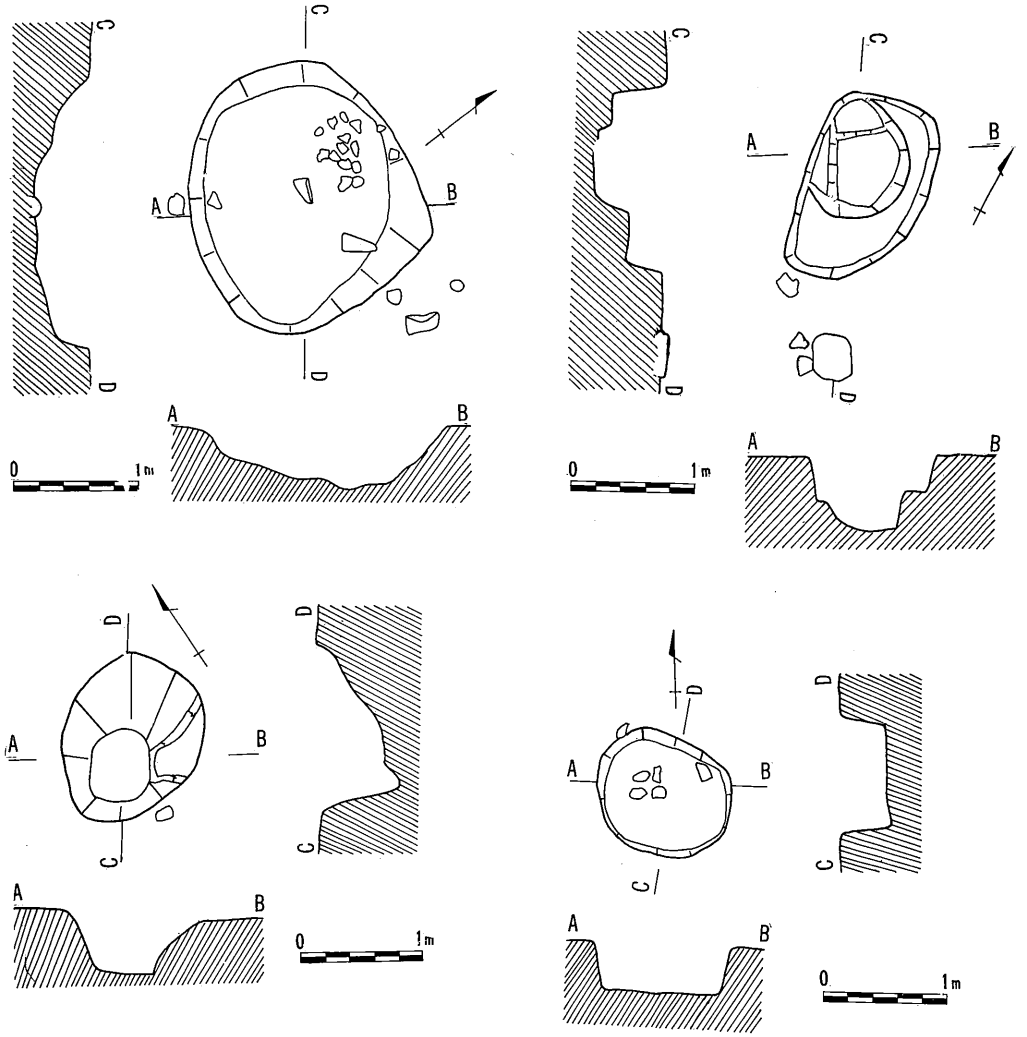
諸磯Ｃ式の土器片が数多く出土した。　（御子柴泰正）

第３号竪穴（９図、図版４）

第３号竪穴は砂礫混りのローム層を約40cmほど掘り込み、構築されている。平面形は卵形を呈し、南北に長軸方向を持ち、その規模は長軸約１ｍ35cm、短軸（東西）約１ｍ10cmを測る。底部はわずかに踏みかためられた形跡が認められる。

北壁は急傾斜をなし、壁高は約50cmを計える。これに対し南壁は壁画がほぼ垂直に、東壁は中段が設けられて、それぞれ構築されている。前者の壁高は約60cm、後者のそれは約45cmを測定できる。

床面はなだらかな椀状を呈し、幾分凹凸が確認できた。覆土中より少量の炭化物は検出されたが、遺物は全く出土しなかった。　（福沢幸一）



第９図　竪穴実測図(左上第１号、右上第２号、左下第３号、右下第４号)

第４号竪穴（第９図、図版４）

第４号竪穴は砂礫混りのローム層を掘り込み、構築された竪穴である。平面は円形、断面は円筒形を呈し、南北１ｍ程、東西１ｍ10cm程の規模を有している。壁は全周し、掘り込み面が割合に平坦な為に、壁高自体にも大差はなく、凡そ30cm前後を測定できる。垂直に近似し、面に細礫が露出し、それが為にでこぼこしている。

床面はわずかなタタキになっており、多少の凹凸を認める。また床面に密着あるいは埋没している自然石は本竪穴と無関係であることを加えて述べておきたい。覆土中より少量の炭化物を検出した。

遺物は諸磯期の古い方に属する土器片がかなりの量出土した。第３号住居址と第４号竪穴は接近して、発見された遺構であるが、出土土器より明らかに時間差があると思われる。（小池政美）

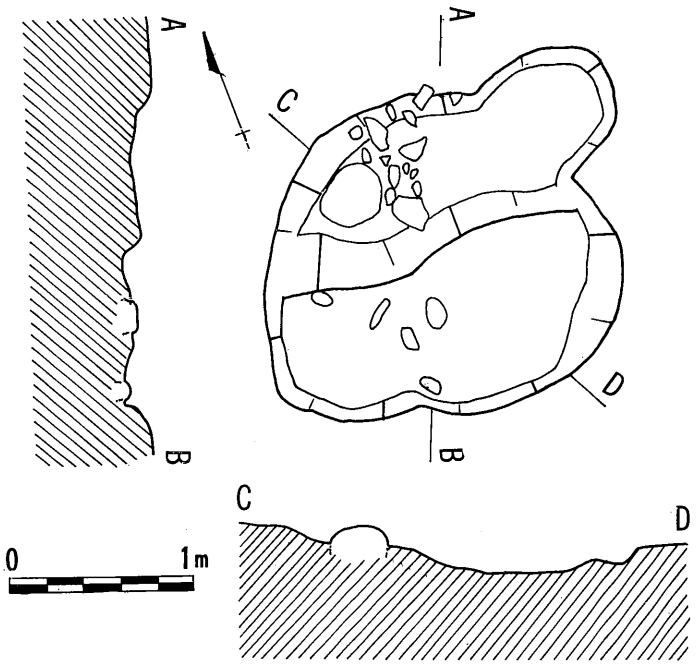
第５号竪穴（第10図、図版４）

まず第一に遺構名に関して考えてみよう。竪穴としては疑問点もあるが、適当な遺構名がないために、あえて、これを使用させてもらいます。

第５号竪穴は表土面から30cm位下ったローム層を掘り込み構築された遺構である。南北１ｍ70cm、東西１ｍ85cm程の規模を有し、平面プランは北東隅がこぶ状に突出した不整円形を呈している。壁は全周はしているが、高い個所でも10cm前後に過ぎない。壁面はなだらかな内傾状を呈し、状態はあまり良くない。

床面はローム層それ自体を丹念に踏み固めて築いたとみえて極めて良好であり、わずかに凹凸が確認できた。竪穴のほぼ中央部に、南西から、東西に走る袋状のものが発見された。これはおそらく一種の段付状のものであると思われるその理由として、レベルをみてみると、北側のは高く南側のは低くなっている。北西隅に南北30cm、東西30cm程の平板状の花崗岩を芯にして、東側に列状に細礫を敷きつめてある。これらはわずかに、火を受けて変色し、少量の炭化物が附着していた。遺物は灰釉陶器の口縁部片が極めて多く、しかもそれは意識的に破壊した形跡がみられた。火を伴なうこと、遺物の出土状態などからして祭礼的な可能性が強いと思われる。

（小池政美）



第10図　第５号竪穴実測図

第Ⅳ章　遺　　物

第１節　土　　器

今回取り扱う土器を、第１群土器（薄手指痕細線文土器）、第２群土器（文様が縄文で大部分を占めているもの）、第３群土器（文様内容によるもの）に大別し、その中を特徴ある文様によって類に細別して観察を加えてみよう。

第１群土器（第11図（１～２））

いわゆる広義の木島式に属するものを第１群土器とする。色調は灰褐色を呈し、焼成は極めてち密に製作されている。おせんべい式土器と俗称されているように厚さは３㎜～４㎜程度である。

第２群土器　（第11図（３～41））

前述したとおり文様は縄文が大部分を占めているものを第２群土器とする。その中を縄文の施文方法あるいは胎土等の特徴によって分類してみると次のようになる。

Ａ類　（３～８）

薄手式の範囲に属するものをＡ類とした。縄文は羽状（３、８）、斜縄文（４～７）がそれぞれ施されている。細部を着目してみると爪形文（３）、刺突文（４～５）、ただし５は内面に施されている）がみられる。色調は黒褐色（３、８）、黄褐色（４～５）、赤褐色（６～７）を呈し、焼成は中位で、どの破片にもかなりの量の雲母を含んでいる。

Ｂ類（９～10）

羽状縄文で胎土に多量の雲母や繊維を含んでいるものをＢ類とした。色調は黒褐色（９～10）、茶褐色（11）を呈し、焼成は中位である。

Ｃ類　（12～20）

太目（12～16）、細目（17～20）の斜縄文で、胎土に繊維を含んでいるものをＣ類とした。色調は黄褐色（21～22）、黒褐色（23）、赤褐色（24）を呈し、胎土に雲母を含み、焼成は普通である。

Ｄ類　（21～24）

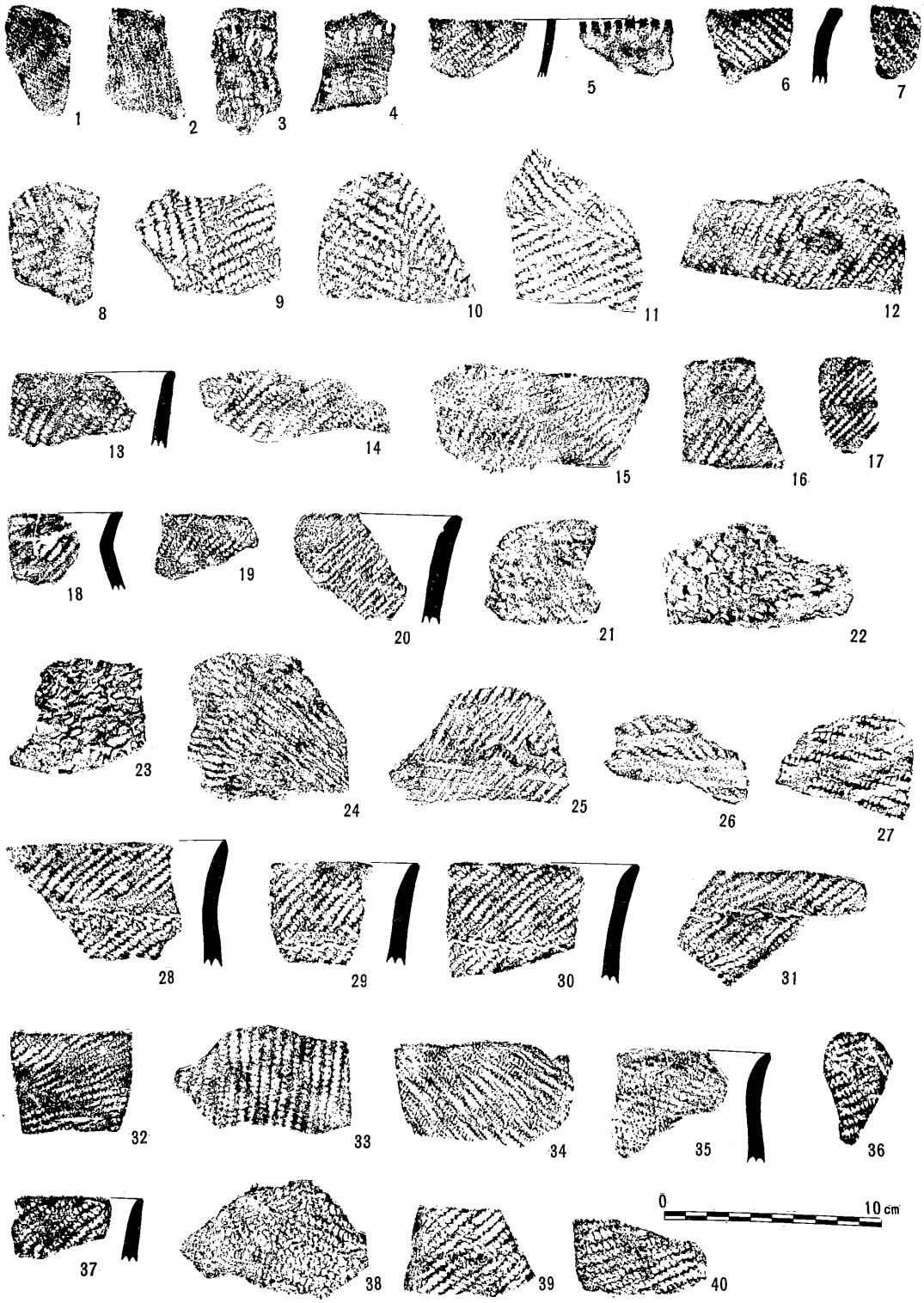
縄文がくずれた状態で施されたものをＤ類とした。色調は黒褐色（21～22）、黒褐色（23）、赤褐色（24）を呈し、胎土に雲母を含み、焼成は普通である。

Ｅ類　（25～27）

縄文地に２～３本の低い隆帯を横位に貼り付け、さらにその上に縄文を配し、装飾的な意図が明らかに窺えるものをＥ類とした。25は拓影では明瞭ではないが、ところどころに隆帯の剝落した部分が認められる。内面に無数の擦痕が横走し、製作工程が判断できうる。色調は茶褐色（25）、黒褐色（26～27）を呈し、胎土に微量の雲母を含み、焼成は良好である。

Ｆ類　（28～31）

結節のＳ字状の綾絡文が横位に走っているものをＦ類とする。色調は薄い茶褐色を呈し、胎土に微粒子の長石を含み、焼成は極めてかたく焼かれている。


1
2
3
4
5
6
7
8
9
10
11
12
13
14
15
16
17
18
19
20
21
22
23
24
25
26
27
28
29
30
31
32
33
34
35
36
37
38
39
40
0
10cm

第11図　土 器 拓 影

G類　(32～40)

器面全面に斜縄文が施され、胎土に極めて多量の雲母を含んでいるのをG類とする。色調は黒褐色（32 35～36）、茶褐色（33～34）、黄褐色（37～40）を呈し、焼成は全般的に普通である。

第3群土器　（第12図（１～35））

前述したとおり文様内容によるものを第3群土器とする。

A類　(1～6)

二つの文様帯より文様構成がなされ、胎土に多量の繊維を含んでいるものをA類とする。上部文様は波状文、下部文様は斜縄文がみられるもの（１～２、５）、２には波状文を取り囲むようにして、上下に二段ずつの刺突文が認められる。５は２と同一個体のように思われる。上部文様はループ文やコンパス文、下部文様は沈線が数条横走しているもの（３～４、６）、６は４と同一系統のものと思われる。色調は灰茶褐色（１）、黒褐色（２、５）、茶褐色（３～４、６）を呈し、焼成は含有物が多い為に極めて不良である。

B類　(7)

比較的間隔のある爪形文が施されているものをB類とする。色調は黒褐色を呈し、胎土にわずかに繊維を含み、焼成は中位である。

C類　(8～9)

櫛状工具による変形刺突文が施されているものをC類とする。色調は黒褐色（８）、茶褐色（９）を呈し、胎土に長石を含み、内面はザラザラしている。

D類　(10～12)

竹管工具による波状文（11）、刺突文（10～12）の極めて簡素な組み合せで構成された文様が数条横走し、他の部分には斜縄文が施されているものをD類とする。色調は茶褐色（10）、黒褐色（11～12）を呈し、胎土に微量の繊維と長石粒を含み、内面には無数の擦痕が縦横無数に走っている。

E類　(13～14)

直線上あるいは弧線状に沈線を連鎖し、独特な文様を構成し、いわゆる連弧状文や肋骨文などと呼ばれているものをE類とする。13には円形竹管文を押捺してある。色調は黒褐色（13）、赤褐色（14）を呈し胎土に多量の雲母、長石を含み、焼成は良好である。

F類　(15～16)

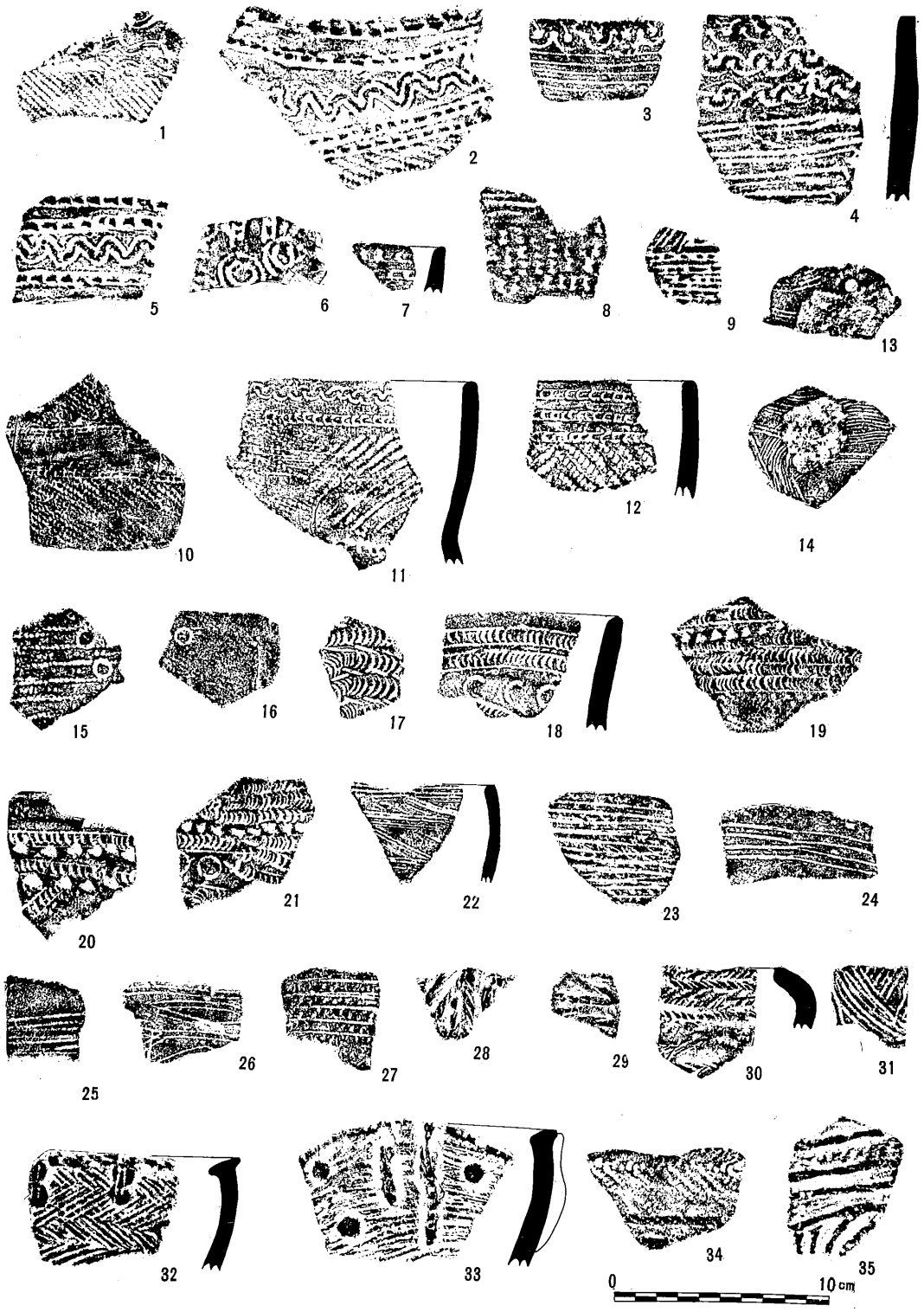
斜縄文に円形竹管文を押捺してあるものをF類とする。色調は茶褐色（15）、黄褐色（16）を呈し、胎土に雲母を含み、焼成は良好である。

G類　(17～21)

主たる文様が連続爪形文によって表現されるものである。爪形文に混って、半円竹管文（18）、円形竹管文（21）、刺突文（19～21）を加飾して図案効果を挙げているものをG類とする。色調は茶褐色（17～19、21）、黄褐色（20）を呈し、胎土に長石を含み、焼成は良好である。

H類　(22～27)

平行沈線文を主たる文様としたものをH類とする。沈線文の中に意匠文として刻目（23）、地文を縄文（27）、沈線自体を変化させたものを（22、26）等がみられる。


1
2
3
4
5
6
7
8
9
13
10
11
12
14
15
16
17
18
19
20
21
22
23
24
25
26
27
28
29
30
31
32
33
34
35
0
10cm

第12図　土 器 拓 影

色調は黒褐色（22、26）、黄褐色（23～24）、赤褐色（25）、茶褐色（27）を呈し、どれも胎土に長石雲母を含み、焼成は中位である。

Ⅰ類（28～30）

浮線文土器を一括してⅠ類とする。色調は茶褐色（28）、黒褐色（29）、黄褐色（30）を呈し、胎土に雲母を含み、焼成は中位である。

J類　（31～33）

集合条線やボタン状突起が付けられているものをJ類とする。色調は黒褐色（31～32）、茶褐色（33）を呈し、胎土に長石粒を含み、焼成は良好。

K類　（34～35）

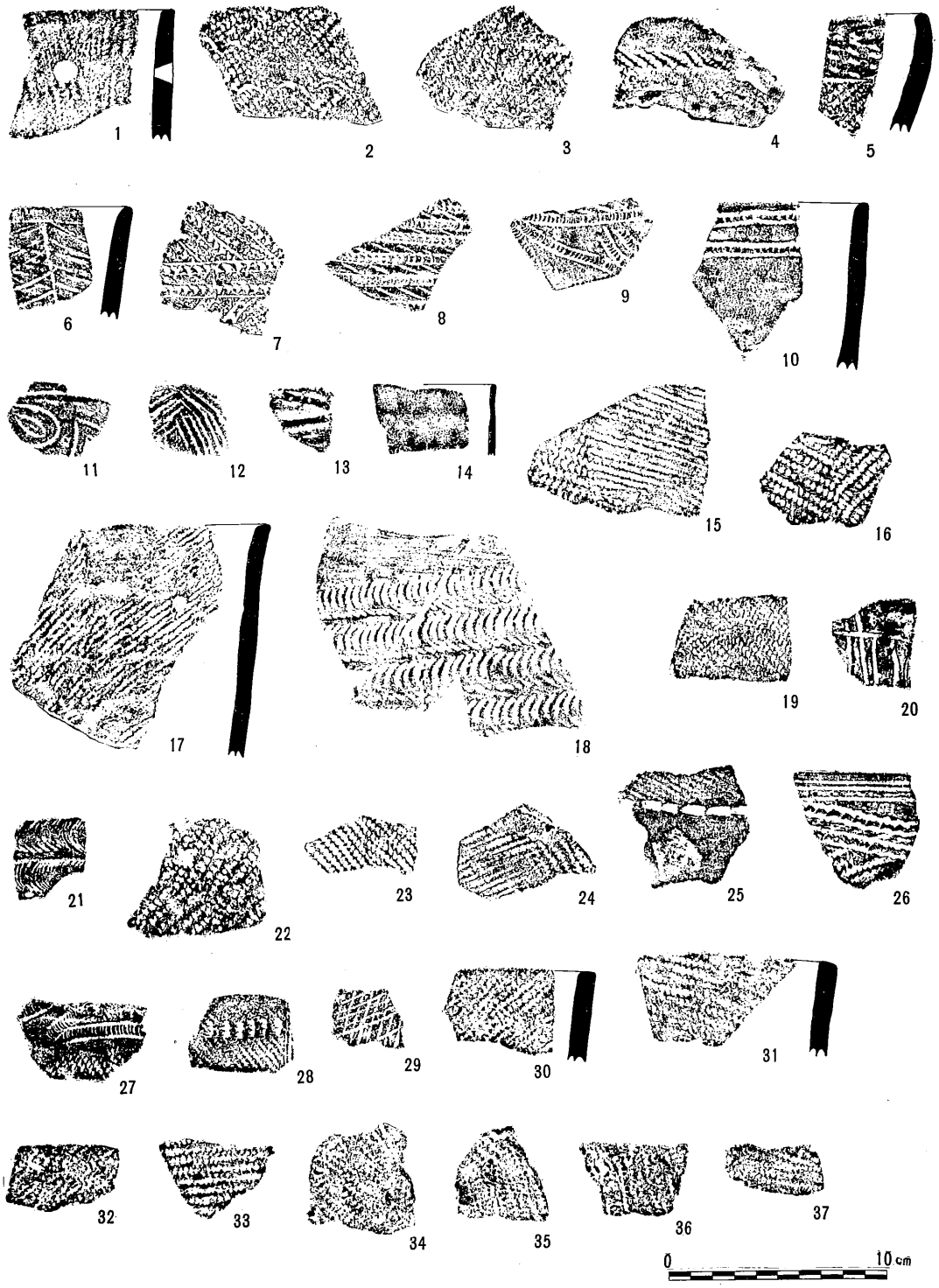
斜縄文地に低くてつぶれたような粘土紐を貼り付けたものをG類とする。色調は赤褐色（34）、黄褐色（35）を呈し、胎土に多くの雲母を含み、焼成は中位である。　（小池政美）

第2節　遺構内出土土器

土器説明を簡潔する為に表をもって説明する。第13図の内訳は（1～13）は第2号住居址、（14～20）は第3号住居址、（21～29）は第1号竪穴、（30～37）は第4号竪穴である。

図版	番号	胎土	保存状態	色調	文様の内容
13	1	雲母を多量に含む	良好	茶褐色	縄文、(補修孔)
〃	2	〃	〃	黒褐色	縄文
〃	3	長石を多量に含む	中位	茶褐色	縄文
〃	4	雲母を多量に含む	〃	黒褐色	縄文 粘土紐貼付
〃	5	〃	良好	〃	刺突文と縄文
〃	6	〃	〃	茶褐色	肋骨文
〃	7	〃	不良	赤褐色	縄文、沈線、爪形文
〃	8	長石を多量に含む	良好	〃	爪形文
〃	9	長石を少量含む	〃	黄褐色	沈線、爪形文
〃	10	〃	〃	黒褐色	沈線、刺突文
〃	11	雲母を多量に含む	中位	〃	沈線
〃	12	長石を少量含む	〃	赤褐色	沈線
〃	13	〃	〃	〃	粘土紐貼付
〃	14	〃	良好	灰白色	無文
〃	15	長石、繊維を含む	不良	赤褐色	縄文
〃	16	〃	〃	茶褐色	縄文
〃	17	雲母、長石、繊維を含む	中位	黒褐色	縄文、(補修孔)
〃	18	雲母、長石を含む	〃	〃	爪形文 内面に擦痕
〃	19	雲母を多量に含む	〃	〃	縄文
13	20	長石、雲母を含む	中位	黒褐色	沈線
〃	21	長石を少量含む	良好	白灰色	爪形文
〃	22	雲母を多量に含む	中位	黒褐色	縄文 内面に擦痕
〃	23	〃	〃	茶褐色	縄文
〃	24	〃	〃	黒褐色	縄文
〃	25	〃	良好	茶褐色	縄文、刺突文
〃	26	〃	不良	黒褐色	縄文、沈線、刺突文
〃	27	長石を多量に含む	中位	茶褐色	縄文、沈線、爪形文
〃	28	〃	〃	黒褐色	縄文、刺突文
〃	29	〃	〃	黄褐色	沈線
〃	30	雲母を多量に含む	〃	茶褐色	縄文
〃	31	〃	〃	黒褐色	縄文
〃	32	〃	〃	〃	縄文
〃	33	〃	〃	〃	縄文
〃	34	〃	〃	赤褐色	縄文
〃	35	〃	〃	〃	縄文
〃	36	〃	〃	〃	縄文
〃	37	〃	〃	〃	縄文

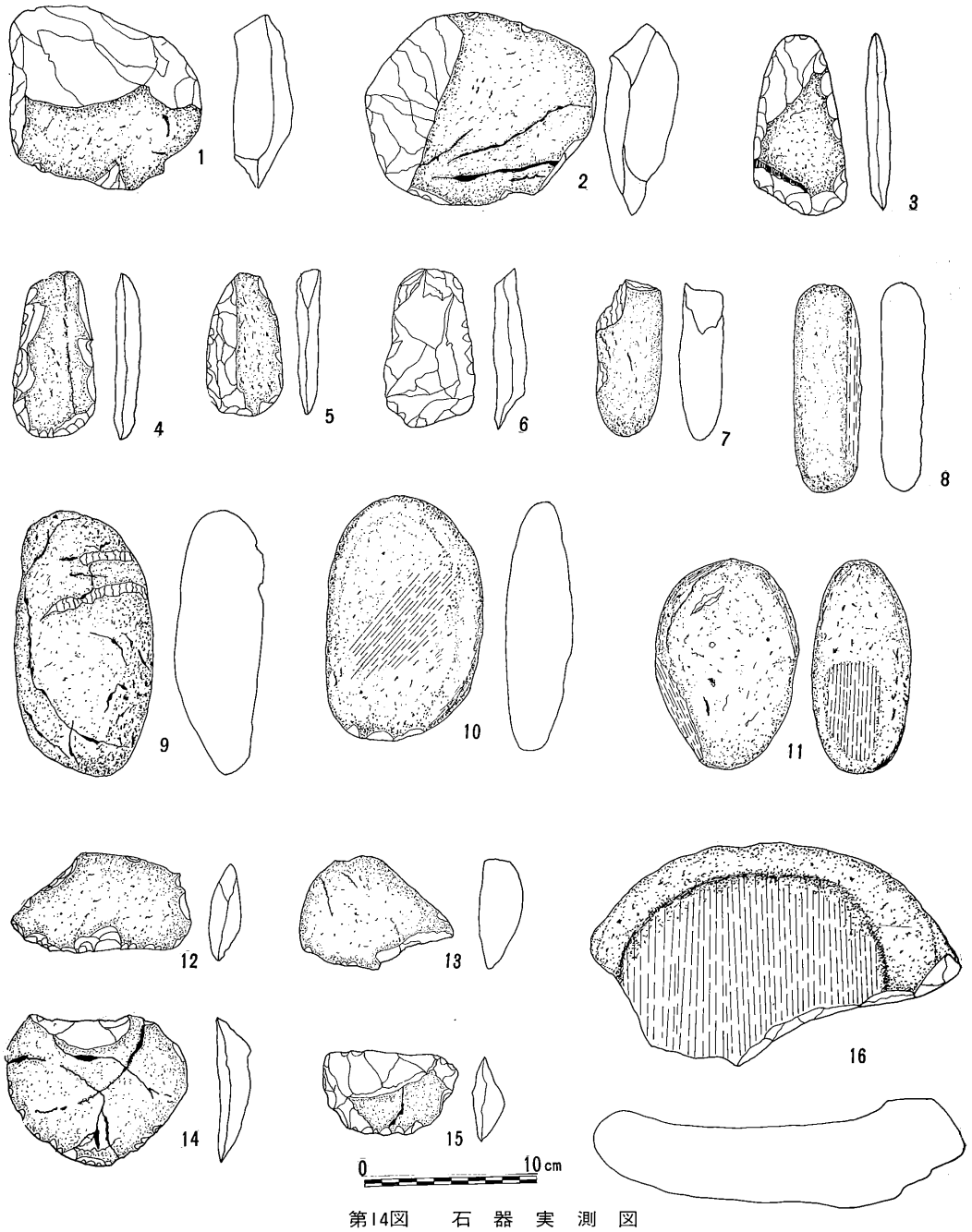
第2表　遺構内出土土器一覧表



第13図　土器拓影（遺構内出土土器）

第3節　石　　器

今回の発掘で石器に関して注目すべき点は、黒耀石あるいはチャートを石材とする石器が1点も出土しなかったことである。



第14図　石器実測図

礫器　（第14図（１～２））

不定形礫器と考えられるもので、自然礫を大きく打ち欠いて、ところどころに自然面を残し、割口の鋭い稜を刃部として利用している。石質はいずれも硬砂岩である。

打製石斧　（第14図（３～６））

石斧の形態は撥形と短冊形が大部分をしめているが、なかには分銅形もある。（３～６）は撥形の石斧で、打調を加えて側面と刃部を整形してある。石質は砂岩（３～４、６）、緑泥岩（５）であると思われる。

棒状石器　（第14図（７～８））

長楕円形状の河原石を用い、周縁または表裏両面を形よく整えて、石器としての機能を充分に発揮できるように工夫をこらしてある。７の上部は欠損している。８の右周縁は両面に磨痕を存している。

石質は硬砂岩（７～８）である。

敲石・磨石　（第14図（９～11））

敲石は（９）、磨石は（10～11）であると思われる。敲石は楕円形状の河原石を用い、上下両端あるいは周縁を利用しつ機能的役割を果している。石質は硬砂岩である。

磨石は部分的に磨痕が認められ、形態は楕円形である。石質は硬砂岩である。

横刃型石器　（第14図（12～15））

刃部が下端、あるいは横に付けてあるからして、このような名称をつけた。石質は硬砂岩である。

石皿　（第14図（16））

破損している為に大きさは不明であるが、完全であればおそらく楕円形を呈していると思われる。中央の凹みは浅目である。石質は花崗岩である。　（小池政美）

第Ⅴ章　所　　見

西部開発事業は、伊那市、南箕輪村、箕輪町の三市町村が、竜西地区を区画整理し、大規模農業に転換させることを目的とし、国県の補助金を受け実施した。

この開発事業区内には数多くの埋蔵文化財包蔵地があり、これ等埋蔵文化財は本事業の性質上壊滅の状況にあるため、県教育委員会では関係地域の埋蔵文化財の分布調査を行ない、それ相当の指導を行っている。

上島遺跡は、南信地方に於ける縄文前期の重要な遺跡として早くから注目されてきた遺跡であるので、伊那市教育委員会は広く考古学関係者の意見を求めるとともに、詳細な現地調査を実施したところ、遺跡地の80％余が畑地として保存されることが明かになったため、遺跡の一部と記録保存することに決定、前述発掘経過のごとき日程で調査を実施した。その結果知り得た二、三の問題点について所見を述べ参考に資したい。

上伊那発見の縄文前期の遺跡。今迄上伊那郡下で発見された縄文前期の出土地点は50余箇所に達してい

る。そのうち主な遺跡を掲げると、

A．中越(宮田)・上島(伊那市)・丸山(辰野)・中村(平出)・松島・上の平・北垣外(箕輪町)・横山B（駒ヶ根中沢)・中河原(飯島町)・細ケ谷・百駄刈(伊那市)・今泉(伊那市)・北大出(辰野町)・羽場下(駒ケ根市)

B．丸山(辰野)・福沢洞・芦沢東畑・宮ノ前(伊那市)・角道(箕輪町)・辻沢・横前(駒ケ根)・御子柴D地点(南箕輪村)・羽場下(駒ケ根市)

C．上棚・長岡南道・長岡荒城・松島神社西畑(箕輪町)・三ツ谷・神戸(辰野町)・カンゼン・月見松・美すずゴウジラ・富県八人塚・名廻・細ケ谷・百駄刈・山の根・唐木原(伊那市)・中沢的場・横山・下曽倉小林・辻沢・羽場下(駒ケ根市)・郷子柴D地点(南箕輪村)・春日平(飯島町)・山寺・高尾・上島下(伊那市)

これ等の内一部の遺跡は調査したが、大部分の遺跡は未調査のためその性格を知ることができない。

そのうち調査された中越遺跡では50を越える縄文早期～前期にわたる遺跡として注目に価するもので，近く調査報告書が刊行される予定である。そのほか辰野町丸山遺跡は，藤森栄一・戸沢克則両氏の指導によって調査された遺跡で、住居址が発見されている。出土遺物からして関東の黒浜式系統のいわゆる有尾式と諸磯期の初頭を飾る南大原式とが出土する遺跡である。以上が上伊那地方で調査された遺跡である。

遺跡の立地．上伊那地方に於ける縄文前期遺跡の立地であるが、まず、宮田村中越遺跡では、小田切川と大沢川に狭まれた細長い台地上に所在する遺跡で、わりあい平坦部に属する遺跡である。辰野町丸山遺跡は、天竜川と小野川との合流点の台地上にある遺跡である。両遺跡共に河川に近い段丘上に占地している遺跡である。まだ未調査遺跡の立地をみると、木曽山脈及び伊那山脈の山麓添の台地とか、両山脈より流れ出る小河川の段丘上とか或はまた、湧水地付近の平坦な場所等伊那谷特有の地形を巧みに活用しバラエテーに富んだ分布状態を示している。今回報告する上島遺跡は諏訪湖に源を発する天竜川と、赤石山脈より流れいずる三峯川と木曽山脈に源を発する小黒川との合流点の段丘上に所在する遺跡で、誠に川に恵まれたと言わざるを得ない遺跡である。

上島遺跡の範囲は、天竜川に添った南北に200m、小黒川添いでは東西150m、面積3万平方メートルにわたって分布する遺跡である。今回調査された位置は遺跡地を南北に走る農道より西側で、発掘面積は約2,000平方メートルの小範囲の調査にとどまった。ここで幸といわなければならないことは本遺跡の主要部分が畑地として残されたということである。

遺構　本遺跡発見の住居址は、縄文前期2軒、土師1軒、灰釉を伴なう土師の住居址1軒。そのほか竪穴5箇、うち縄文前期諸磯期でも古いもの第1・4号、灰釉を伴なうもの第5号、遺物を出土しない竪穴第3号である。

縄文前期の第3号住居址は、関東地方の黒浜期に対比すべきものと思われるものである。そのプランは円形4.1×4.3m、中形の大きさである。炉址は中央に設けられ、その形状は長楕円形の凹みのみで他の施設は見受けられない。

柱穴は住居址内に3箇発見されたのみで他の2柱穴は住居址外に出土した。このことは、宮坂英弐氏の言う自然立木を利用したのではないかと言う説も考えられないでもないが、上屋構造上竪穴外にはずれても式は近ければ差しつかえが無かった架構様式であったかも知れない。今すぐ結論を出すわけにはゆかないが，こうした住居址の柱穴は数多く知られているので今後の研究課題としたい。

第2号住居址　本住居址も諸磯期の古い時期のもので、そのプランは4.5×4.9の円形である。第3号住居址より僅か大きめ、柱穴は3本、これは第3号のように住居外にも何等痕跡を認めることができなかった。このことは前述のような自然立木利用か特殊架構方式かによるものか、いずれも特殊架構様式を有するものとして注目されるものである。炉址は中央やや北寄り床面を僅かに凹め、その周囲に6箇の拳大の自然石が認められた。

第1号住居址　隅丸方形4.0×5.0mのプランを有する竪穴式住居址。柱穴は4本、カマドは西壁に設けられ石組粘土製、遺物は土師・須恵で奈良時代と考えられる。

第4号住居址　隅丸方形4.5×3.9mの竪穴式住居址。柱穴は4本、カマドは両壁やや南寄りに設けられ石組粘土カマである。遺物は土師・須恵それに灰釉を伴なう平安時代の住居址と考えられる。

第1号竪穴　本竪穴は諸磯期の古い時期に対比するものである。その大きさは2.2×1.9m長楕円形を呈する竪穴である。内部は僅かに踏み固めてあるていどで内部施設はなにも認められなかった。

第4号竪穴　第1号と同じ諸磯期の古い方に属するもので、その大きさは1.1×1.0の楕円形、床面は僅かに叩かれている。

第2号竪穴　不整円形1.6×0.9mのプランを有する竪穴で、内部は上下二段に掘り込まれているところは、上原遺跡AⅢトレンチ発見の竪穴に類似している。

第5号竪穴　大きさ1.7×1.85mの不円形のプランの竪穴。内部は第2号竪穴に存したような段が設けられている。床面には平盤状の花崗岩人頭大程の自然石を芯にし、東西列状に細礫を敷詰てある。これ等の施設が火を受けているという事実を記録者は、出土する灰釉陶器の口縁部破片が圧倒的に多いという現象は、或る祭礼的な意味を有するのではないかと考えたようであるが、こうした例は今迄報告されていないので、今後の資料の増をまって考えたいと思う。

次に土器の問題を考えてみよう。

上島遺跡出土土器を通観してみると、最初にこの地に居住したものは縄文早期末葉から縄文前期初頭に位置づけられている木島期から始まる。続いて縄文前期前葉（黒浜期）から縄文前期終末（大歳山期）にいたっている。時代はさらに下るが、奈良時代の土師器、須恵器、平安時代の灰釉陶器が出土している。報告書のスペースの関係で、後者の遺物は、今回、割愛させていただき、後日発表の機会を持ちたいと思う。

第Ⅳ章、遺物で前述したように出土土器の特徴によって3群に大別し、さらに、そのなかを第2群土器では7類に、第3群土器では11類に細分した。

第1群土器は静岡県、南関東、長野県、愛知県にわたって分布している俗称（おせんべい土器）、学名、木島式土器と呼ばれているものと思われる。第2群土器は縄文が主要文様を構成しているもの。

第2群土器のA類は薄手、あるいは爪形文の特徴より、関西地方、特に京都を中心とし瀬戸内海、近畿中部地方に波及している土器で北白川下層でも古い方に属するであろう。

B類は羽状縄文、繊維混人等より関東の黒浜式に並行するものと思われ，特に信濃に於いては有尾式との関連性を考えてみる必要性がある。

C類は斜縄文、D類はくずれた縄文で黒浜式に考えてよかろう。

E類は隆帯をつけたいわゆる浮隆文土器の一種で、編年からすれば北白川下層の新しい方に位置づけで

きうると思われる。

F類はS字状の綾絡文、G類は斜縄文、多量の雲母混入により諸磯A式、信濃に於ける南大原式に類似すると考えられる。

第3群土器は文様内容によったものを一グループとしたものである。

第3群土器のA類は波状文、ループ文、コンパス文。B類は爪形文。C類は変形刺突文。D類は波状文や刺突文、胎土においてはA類B類。D類は繊維を含んでいる。文様、胎土の二観点よりA類からD類は黒浜式と思われる。

E類は連弧文、肋骨文、F類は円形竹管文。G類は連続爪形文。H類は平行沈線文等の文様は諸磯A式を特徴づける代表的な文様である。例外としてH類の（22～23、27）は有尾式の文様特徴を含んでいる面も窺われる。

I類は浮線文土器で一見するに諸磯B式と決めつけてよかろう。

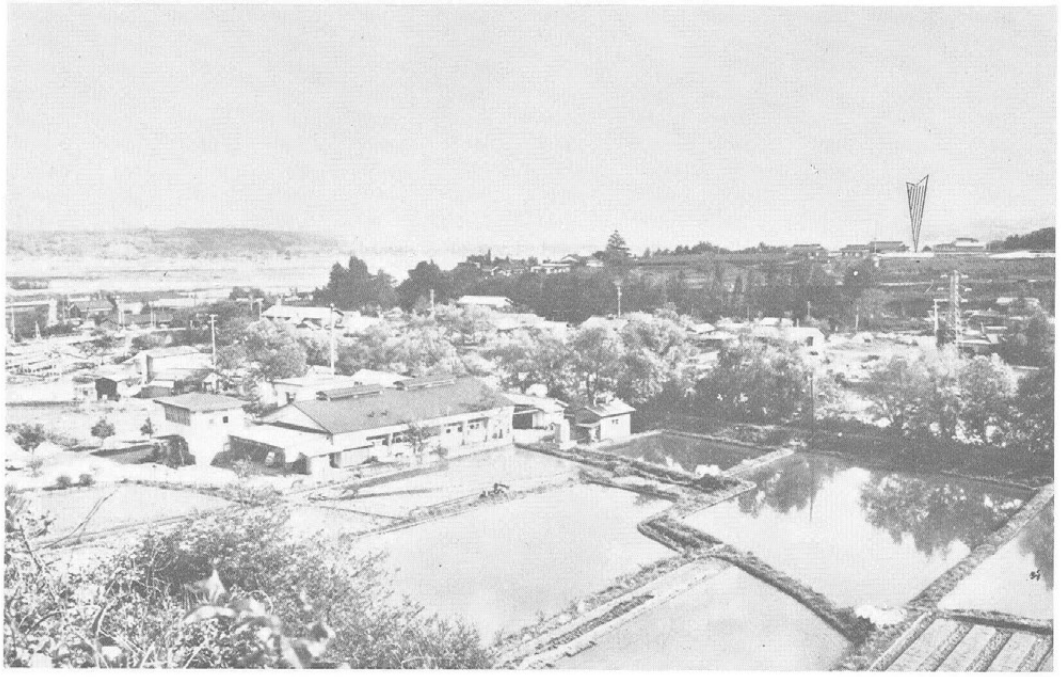
J類の集合条線やボタン状突起は諸磯C式を裏付けできる必要十分な文様である。

K類はつぶれた粘土紐貼り付け文様で、関西地方によくみられる大歳山の一種と思われる。

（友野良一・小池政美）

参　考　文　献

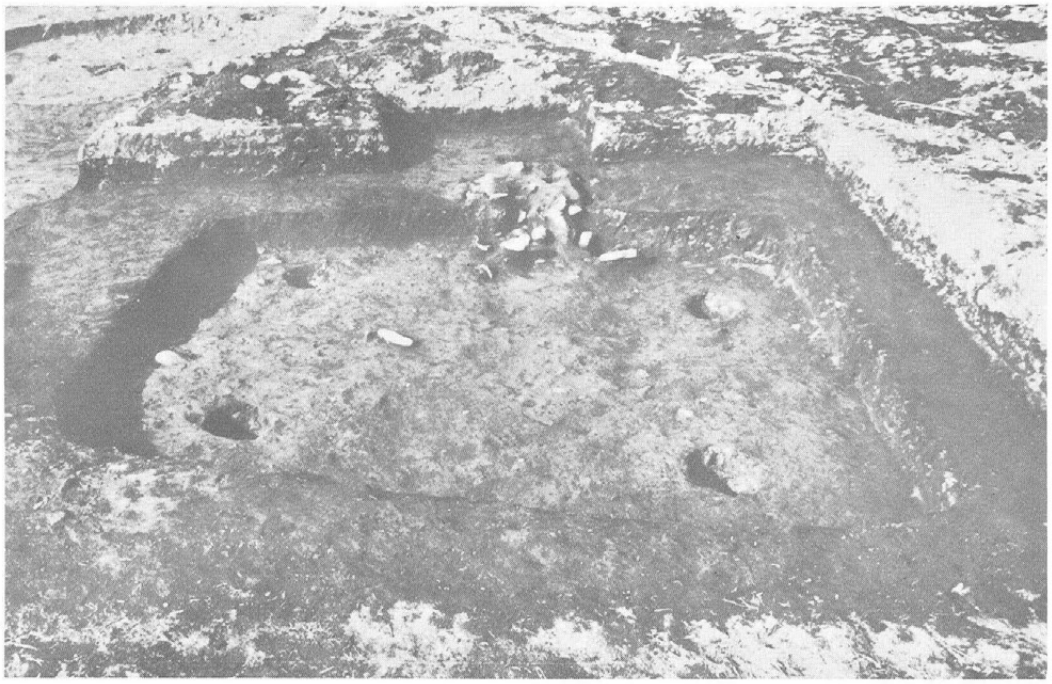
註1.	信濃資料刊行会	信濃資料第1巻下	昭和31・3・31
2.	杉原荘介	日本考古学講座（3）	昭和31・5・30
3.	長野県教育委員会	上　　原	昭和32・12・14
4.	山内清男	日本原始美術（I）	昭和39・3・10
5.	鎌木義昌	日本考古学（II）	昭和40・7・30
6.	上伊那郡教育委員会	上伊那誌歴史編	昭和40・10・1
7.	藤沢宗平	有明山社	昭和44・3・
8.	宮田村教育委員会	中越遺跡	昭和44・3・
9.	〃	〃	昭和45・3・
10.	原嘉藤、藤沢宗平編	唐沢・洞	昭和46・3・
11.	駒ヶ根市教育委員会	舟山遺跡（第1次、第2次）	昭和46・3・
12.	〃	羽場下・舟山	昭和47・3・



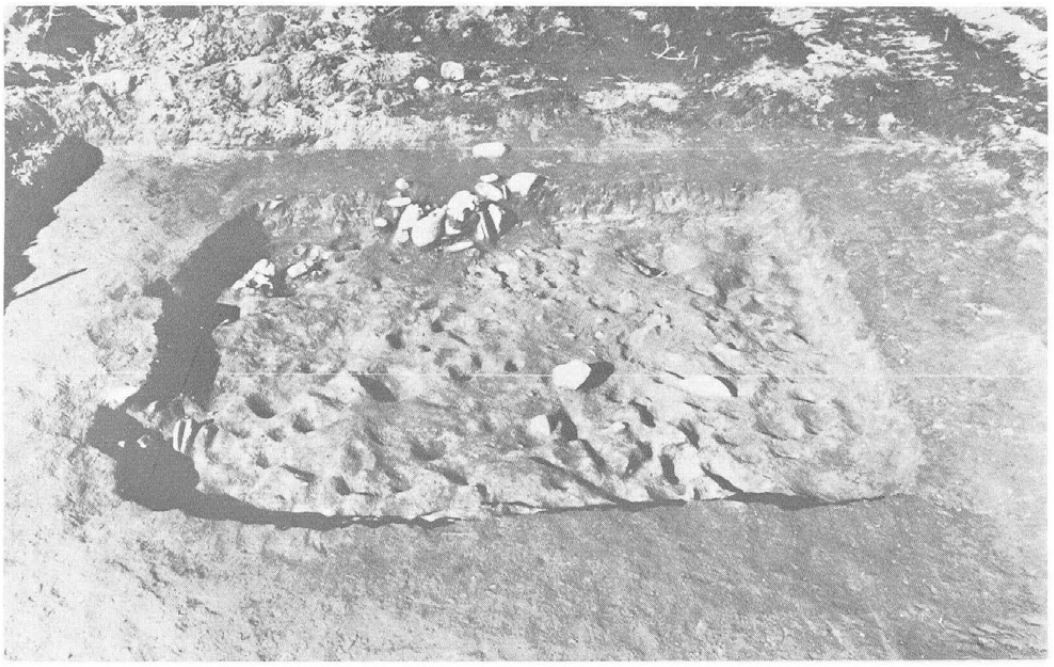
小黒川対岸より遺跡地を望む

山本部落より遺跡地を望む

図版Ⅰ　遺跡全景

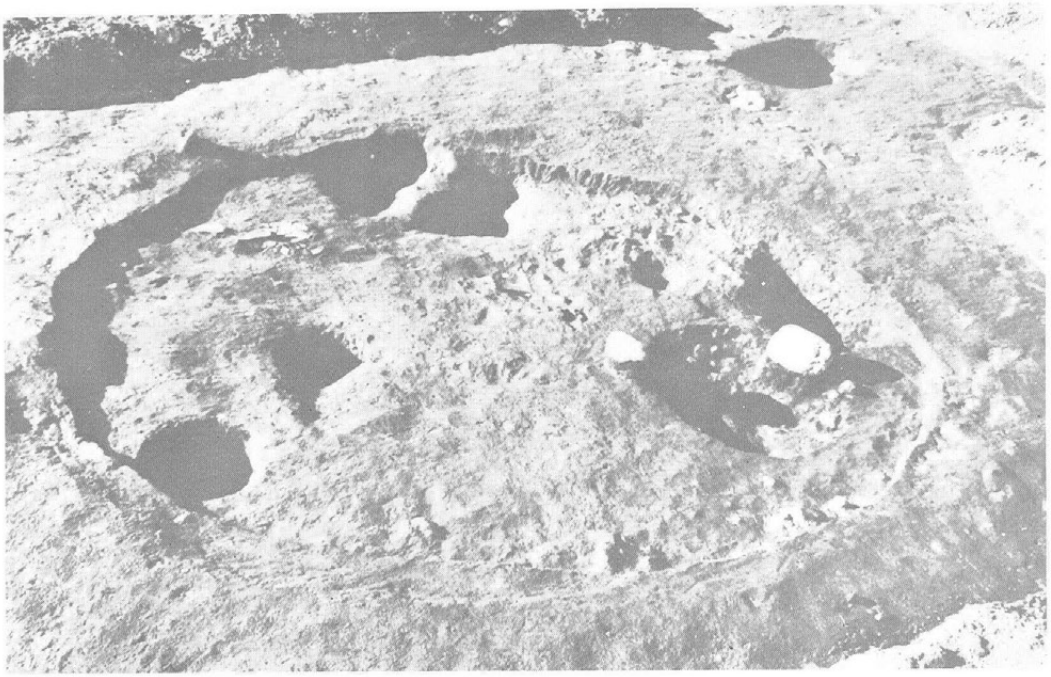


第１号住居址



第４号住居址

図版２　　遺　　構（住居址）



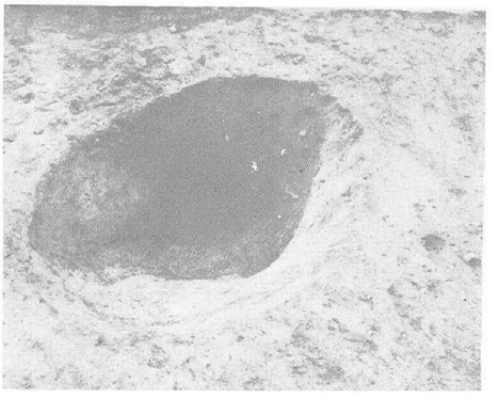
第 2 号住居址

第 3 号住居址

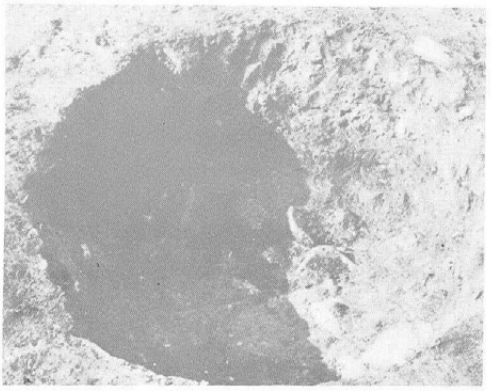
図版 3　　遺　　構（住居址）

第１号竪穴

第２号竪穴



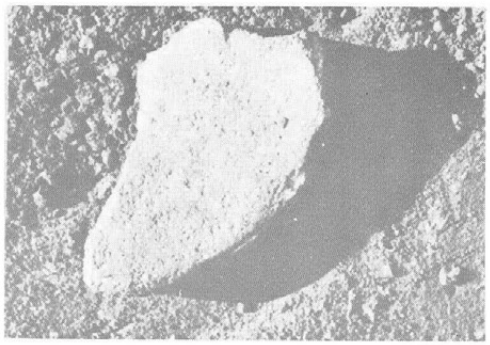
第３号竪穴



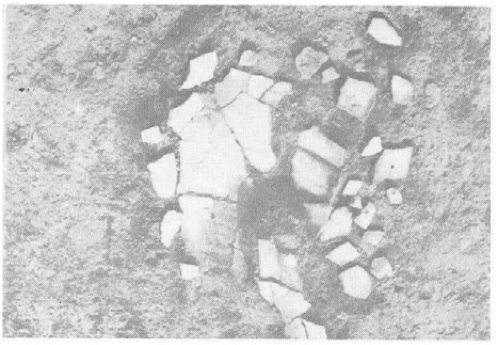
第４号竪穴

第５号竪穴

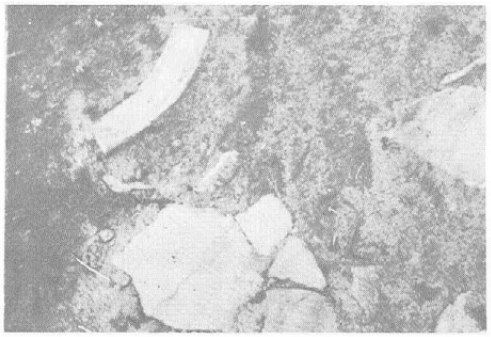
図版４　　遺　　構　（竪　穴）



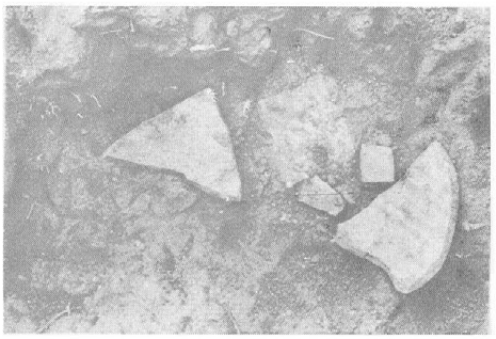
石　皿（B 地 区）



縄文土器（第 2 号住居址）



土 師 器（第 4 号住居址）



須恵器（第 4 号住居址カマド）

記　念　撮　影　（第 3 号住居址北側にて）

図版 5　　遺物出土状況および記念撮影

上　島　遺　跡
—緊急発掘調査報告

昭和49年3月30日　印刷
昭和49年3月31日　発行

発行所　長野県伊那市教育委員会

印刷所　長野県下伊那郡松川町元大島
松川印刷有限会社